

## □

次のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 彼女の才能がハッキリされた (2) 夜中に床にツク (3) それではスジが通らない  
(4) 明るくホガらかな性格 (5) イサギヨい決断 (6) お年玉をチョキンする

## □

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

時計を持たない庶民の暮らしには、朝、昼、夕方そして夜の区別で十分でした。起床時間も職種でバラバラ、食事は定時ではなく空腹時にとります。自営業ならば日によっても労働時間が違い、季節によって職種を変える人も多く、フリーターに近い世渡りが奇異ではありませんでした。④「一斉に通勤・下社という集団移動は稀だったのです。」

引け四つ（夜の十時前後）に⑤各町内は一部の木戸を閉めますが（すべての木戸が閉められたわけではありません）、あらかじめ木戸番に「今日は遅いよ」とひと声かけておけば、通れます。本来は、町を区切る木戸を閉めたあとは通行が規制されます。これにより不審者の夜間通行を阻止することができました。かといって夜遊びがかなわないのかといえば、大丈夫。町内の住人であるとい頃からはつきり知られていれば「顔パス」でオーケー。とはいえ、度重なれば、「また、おまえか」と呆れられるのは必至です。門限破りもほどほどにということです。

時間ばかりか、江戸には曜日もなかったもので、週休はなく、土日・平日の別もありません。盆と正月以外に公の休日は定められていませんから、連休に行楽地がごった返し、道が大渋滞するということもあります。休日の多くは、その家の忌日（供養すべき命日）などの個々の事情により、いっせいで共通の休暇に振りまわされないマイペースの予定を組むのも自在でした。〔ア〕

江戸城の近くに住んでいる人の中には、登城と下城を知らせる城の太鼓を営業時間の目安にする人もいました。登城する侍の袴の衣擦れのシュツシュツという音を聞いて、⑥腕に気合を入れる職人衆もいたことでしょう。〔イ〕

外で仕事をするほど、お天道様すなわち時刻の推移に敏感です。例えば、天秤棒の前後の籠に商品をぶら下げて売り歩く「振り売り」は、空を見て仕事をしま

す。晴れならば長く稼ぎ、雨だと早じまい。気分の問題もありますが、天気に対して感覚が鋭く、⑦風向きや湿気、雲行きなどによる仕入れの判断も的確です。⑧雲行きが怪しいから、少なめに仕入れて手前で切りあげよう」という具合で、空の荷を持ち帰って長屋の戸を閉めたたん、雨がザーッと降るなんてことも珍しくないとか。〔ウ〕

時計も曜日もなかった江戸ですが、五感で感じる時の流れには敏感です。太陽の位置で時刻を知り、月の位置で日にちを知り、星を見て季節の移ろいを読み取ります。江戸の人の月への関心は深く、月の微妙な欠け方の違いを、「十六夜」「十七夜」などと風雅に呼び分けています。星については、北斗七星は古くから知られており、（一年中天空に見られる）霊力のある星座として信仰を集めていました。ほかの星座についても四季折々の位置の変化を細やかに読み取っていました。

腕時計も天気予報もなく、天然自然の変化を身体全体をアンテナとして察知したのは超能力でもなんでもない、ごく当たり前のことでした。けれど、今の私たちのアンテナはすっかり錆びてしまい、既製のデータなしには一日の行動を決定できずにいるのです。我々の日常に不可欠な腕時計は、江戸人から見れば「⑨時の手鎖」と見えるかもしれません。〔エ〕

\*木戸 町の境界に設けた防犯のためのゲート

\*木戸番 木戸の守衛

（杉浦日向子『お江戸風流さんぽ道』小学館文庫）

(1) 次の文は〔ア〕～〔エ〕のどの位置に入りますか。

彼らは、決まった時刻に決まったコースを毎日巡るので、在宅の人は売り声を聞いて、今何時か知ることができましたし、来るはずの時刻に来なければ、じきに雨が降ると察しました。

(2) ①「一斉に通勤・下社という集団移動は稀だった」のはなぜですか。

ア 町人たちの時間に対する感覚がともゆるかったから。 イ それぞれの仕事によって働く時間帯に差があったから。  
ウ 現代に比べると、自宅で仕事をする人が多かったから。 エ 当時は個人の意識が強く、集団で行動しなかったから。

(3) ②「各町内は一部の木戸を閉めます」という理由を本文中から十三字で探し、はじめと終わりの三字を書きぬきなさい。

(4) ③「腕に気合を入れる職人衆」とはどういうことですか。

ア 自分の仕事に対しては高いプライドを持っている職人たち  
イ 気が短くてけんかっ早く、とても威勢のよかった職人たち  
ウ 時間に対してはルーズでも、高い技術力を持った職人たち  
エ これから始まる一日の仕事に気持ちを高めていく職人たち

(5) ④「風向きや湿気、雲行きなどによる仕入れの判断」について、なぜこのような判断をするのですか、「……するから」に続くように、本文中から十七字で探し、はじめと終わりの三字を書きぬきなさい。

(6) ⑤「雲行きが怪しい」という慣用語と同じ意味になるように、次の（ ）に入る語をひらがな三字で答えなさい。

（ ） な予感がする。

(7) ⑥「時の手鎖」とはどのような意味ですか。

ア 自然現象を的確にとらえる、超能力とも思える憧れのもの  
イ 一見不必要にも思えるが、自然の変化を細やかに読み取る便利なもの  
ウ 時をわがものとし、自然と人間を結びつけ美しく飾ってくれるもの  
エ 自然の流れの中での生活に反し、自分たちをしばりつけるもの

三 次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

あめ玉 竹内 てるよ

来客のもって来て私にくれたあめ玉を  
もらって しゃぶったばかりを祖母に呼ばれ  
それを口から出されてとられてしまう  
あめ玉は上のおさとうがとれて  
少しべたついたまま ふくろにもどり  
山みちをはるばる それをかせしにゆく  
しゃぶりがけも入ったまま先方にもどし  
さて 祖母はその家を出る  
かえりにお菓子屋へよって同じあめ玉をかう  
「なめてもいいの？ かせさないの？」  
と ①しゃぶりはじめ  
さつきのあめ玉と このあめ玉と  
どちがうのか ②さつぱり判らない

物をもらうと「わいろ」になるのだと  
ただそれだけをきかけて走ってゆく  
海風をふくれた 頬にうけて  
「わいろ」のあめ玉だって甘かったとふと思う。

私の祖父は ③であった。  
息子がお世話になりましたと、  
たとい とうもろこしを焼いてもって来ても  
祖母は叮嚀にそれをかえすのであった。

（川崎洋『すてきな詩をどうぞ』筑摩書房）

- (1) ① に入る言葉を答えなさい。  
ア 真意を聞き返して イ 念を押して ウ 根を詰めて エ 地団太を踏んで

- (2) ② 「さつぱり判らない」について、このときの〈私〉の心情として適当なものはどれですか。  
ア 困惑 イ 期待 ウ 遠慮 エ 失望

- (3) ③ に入る言葉を答えなさい。  
ア お医者さん イ 判事さん ウ 職人さん エ 地主さん

- (4) 左はこの詩を説明した文章です。以下の問いに答えなさい。ただし、④には(3)で答えたものが入ります。

この詩は、〈私〉がある客から「あらあ、かわいいねえ。これをあげましょう。」などと言われてあめ玉を一袋もらったところから始まる。嬉しくて何も考えずに〈私〉が砂糖部分をしゃぶり始めたところを、祖母がやって来て客へ返しに行くという話だ。祖母との思い出の一幕をただ回想しただけのように思われるが、たとえ幼い孫が ④と知らずに受け取ったものでも、何とかして先方に返すという、⑤を夫にもつ ⑥あふれる ⑦祖母の強い信念が感じられる。この祖母の行動は、人としてあるべき姿・根源的な指標を幼い〈私〉に教えるためでもあったのかもしれない。

- ① ① に入る言葉を詩中から書きぬきなさい。

- ② ② に入る言葉を答えなさい。  
ア 正義感 イ 危機感 ウ 優越感 エ 罪悪感

- ③ ③ 「祖母の強い信念」が特に表れている部分を詩中から三十字以上三十五字以内で見つけ、はじめと終わりを三字ずつ書きぬきなさい。

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

多くの人が今の社会は生きづらいと言う。  
長いこと農林業者や職人、漁業者達に会って話を聞いてきた。明治生まれも大正生まれも昭和の方もいた。その方々も、**①**自分たちは生きやすく、楽しい人生を送ってきたと言わなかった。  
私が会った多くの方々は徒弟制度のなかで技を身につけ生き方を学んできた人達だった。林業者達は親方や先輩に仕えて、道具の使い方や山や木の性質、癖を読み取る方法を覚えて一人前になった。漁師達もそうだ。父や兄の船に乗り込み、飯炊きから始めて、その日の水温や風の流れを読み、漁場を決め、そこに合った道具を選び、漁獲を得るようになる。  
教える親方や先輩達は「見て学べ」と言うだけだった。自分の指先や感覚、体が覚えた技を伝えるには**②**言葉はあまりに幅が狭すぎるからだ。  
左官屋の親方が「平らに仕上げろ」と指示したときには、物差しで測った平らではなく、見た目の平らさを求めている。大きな平面は**③**見える。だから左官は壁の真ん中をそつと盛り上げる。その加減は感覚で身につけるのだ。親方の指先と目、親方が仕上げる道具の完成度を手に入れねば、その平らさは手に入れない。  
炭焼きの弟子は、親方が作業を決める炎の色や煙の匂いを親方と同じように見分けなければならない。親方の鼻も目も記憶もそのままもらうことはできないから、叱られ、「違つ」と怒鳴られながら自分の感覚を親方に近づけたのである。時間のかかる辛い修業であった。しかし、習得することは仕事を手に入れることであり、家族を養い、自分が生きていく術であった。  
やがて一人前になり、腕を上げれば、**④**は上がり、利益も出るようになるが、**⑤**目指す到達点が遠いことに気づく。だから日々努力を惜しまなかった。努力だけが自分を補ってくれる手段だったからだ。努力は辛いものであったが、

喜びも伴っていた。積み重ねれば明日があり、報われることがあったのだ。  
しかし、時代は変わった。時間のかかる訓練を避け、効率の向上を目指した。効率こそが価格競争に勝てる最高の武器だと考えたからだ。工場はもちろん、漁師は機械を満載した高速船を手に入れ、農業者はトラクターを買った。森林の伐採も機械がする。  
世の仕組みも、人々の考えも努力や修業、技を持つ体を不要なものとしたのだ。技はデータとして機械に組み込まれ、**⑥**人間に付属するものではなくなってしまう。修業は人を磨き、生き方を支えるものであったのだが、それがなくなった。  
今、人は働かされていると感じている。そこでは隠された能力が引き出されることがない。見つけ出す過程がなくなったからだ。報いは金銭であり、喜びが薄っぺらなものになってしまった。働くことの意味が変わったのだ。  
働くことと生きることは人生の**⑦**であった。生きづらい世の中と思う人が多いのは、働くことに喜びが伴わなくなったからではないか。私の会ってきた人々は自分の仕事を語るとき、苦しかったと言いながら、**⑧**表情に生気があり、誇りがにじんでいた。  
社会が変わっても人は生きていかねばならない。働かねばならない。機械を捨てろというのではない。効率も必要だ。しかし、新しい時代の中で働く意味と喜びを見つけ出さなければ、生きづらさが増すばかりだ。  
働くことの喜びをどうやって復活させるのか。お手本はほんのこの間までの日本にある。たくさんの方達の話を聞いてきてそう思う。

〔塩野米松「働く喜び 技持つ体で」朝日新聞・2009年10月14日〕

(1) **①**「自分たちは生きやすく、楽しい人生を送ってきたと言わなかった」とあるのはどうしてですか。

- ア 一人前になってもなかなか家族を養うまでにはなれなかったから。  
イ 世界的な価格競争の中で自分の持っている技術がうもれてしまったから。  
ウ 厳しい修業を通して親方や先輩の技を身につけるしかなかったから。  
エ 働くことと生きることの意味がこれまでとまったく違ってきているから。

(2) **②**「言葉はあまりに幅が狭すぎる」とはどういうことですか。

- ア 職人の複雑な感覚を表現するには、言葉は万能ではないということ。  
イ 職人が使う便利な道具のように、言葉は仕事を仕分けられないということ。  
ウ 職人の見て学ぶべき技術の伝達において、言葉は理解されやすいということ。  
エ 職人が使う言葉と弟子が使う言葉では、言葉の意味が違ってしまふということ。

(3) **③**に入る言葉を答えなさい。

- ア せまく イ ゆがんで ウ へこんで エ 平らに

(4) **④**に入る言葉を本文中から一語で書きぬきなさい。

(5) **⑤**「目指す到達点」とは具体的に何ですか。

- ア 働くことで得られる喜び イ 身につけるべき技術の完成度 ウ 生きて家族を養う収入額 エ 限られた時間でできる仕事量

(6) **⑥**「人間に付属する」という表現と同じ意味で使われている表現を本文中から見つけ、六字で書きぬきなさい。

(7) **⑦**に入る表現を答えなさい。

- ア 明と暗 イ 功と罪 ウ 裏と表 エ 攻と守

(8) **⑧**「表情に生気があり、誇りがにじんでいた」とありますが、それはなぜですか。

- ア 自分の腕一本で家族を支える収入を得、大黒柱としての役割を果たしたから。  
イ 技術の向上により世界的な価格競争に打ち勝ち、存在意義を高められたから。  
ウ 自分が弟子として受けついだものを、機械を通し永久的に後世に残せるから。  
エ つらい修業や努力の成果として、すぐれた感覚を手にすることができたから。

五 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

夕方の公園でいつも読書をする美しい女性と、その女性に好意を持ちつつも遠くから眺めている青年。ある日青年は彼女が不注意で落とした本を拾い上げ、初めて彼女に声をかけた。その日の彼女の服装は帽子にヴェール、そして灰色のドレスであった。

女は、ゆつたりと彼を眺めまわした。平凡な、きちんとした服装、表情にもとり立てていうほどの特徴のないのが特徴となっていた容貌である。

「よろしかったら、おかけになってもかまいませんことよ」と彼女は張りのある、おっとりとしたアルトの声で言った。「ほんとうは、おかけになっていただきたいのですわ。本を読むには、もう暗すぎますもの。お話をしたほうがよろしいのです」

幸運に仕える下僕は欣然として彼女のかたわらに腰をかけた。

「おわかりでしょうか」と彼は、公園で行われる集会の議長が開会の言葉をいうときの例の紋切型の言葉を用いて言った。「ぼくは、ずいぶん女のひときを見てきましたが、あなたほど、ほんとうにうつとりするようなひとは見たことがないということが？ ぼくは昨日も、あなたに注意をひかれておりました。あなたのその美しい目に、一人の男がふらふらになってしまったことなど、おまえさんは、ごぞんじないと思います」

「あなたがどういってお方が存じませんけれど」と女は冷やかな口調で言った。

「お忘れになってはいけませんわ、わたしがレディだということを。でも、たっ

まちがいではあっても、それほど不自然なまちがいではないでしょうから――

④あなた方のあいだではね。おかけくださいと、わたしは申しあげましたけれど、そのために、わたしに向ってそんななれなれしい言葉を使うのでしたら、いまのお誘いは取消しますわ」

「心から失礼をおわびいたします」と青年は詫言。さつきまでの満足の表情は後悔と恥ずかしさの表情に変わっていた。「ぼくが悪かったのです、ほんとうは

――つまり、公園にはいろいろな女がいますので――それで――むろん、あなたにご存じないでしょうけれど――」

「そのお話は、どうぞもうやめてくださいな。むろん、わたしにはわかっていますわ。それよりも、わたしに教えてくださいな、あちこちの小径をぞろぞろ通つてゆく人たちのことを。あの人たちは、どこへ行くのかしら？ なぜ、あのよう

に急ぐのかしら？ あの人たちは幸福なのかしら？」

青年は、たちまちそれまでの⑤なれなれしい態度をかなぐり捨てた。いまや自分の役割は、完全に受身であるときとつたからである。しかし、どういう演技を期待されているのか、彼には見当がつかなかった。

「あの人たちを見ていると面白いですね」と彼は相手の気持にさぐりを入れながら答えた。「これこそすばらしい人生劇です。夕食をとりに行く人たちもいるし、また――その――どこか別のところへ行く人もいます。あの人たちは、いったいどういう過去をもっているのでしょうかね？」

「わたしはそんなことは、考えませんわ」と女は言った。「わたしはそれほど詮索好きではありません。わたしがここへきて、こうして腰かけているのは、人間の偉大な、共通の、いきいきした心に、曲りなりにもふれることができるのは、ここだけだからですわ。わたしにふりあてられた人生劇での役割は、そういういきいきした動きがすこしも感じられないところにあるのです。なぜわたしがあなたに言葉をおかけしたか、その理由がおわかりになりますか、ミスター――？」

「パーケンスタッカー」と青年はその後自分の名をつけ足した。ここで彼は熱烈な希望にみちた表情になった。

「おわかりにならないでしょうか？」と女は、ほっそりした指を一本立てて、かすかに笑った。「でも、すぐにおわかりになりますわ。新聞や雑誌に名前を出さずにおくことなど、とうていできませんものね。写真だってそうですわ。こうして小間使のヴェールと帽子をかぶっているからこそ、どうにか身分をくらまして外出することができのですわ。あなたにお見せしたいくらいですわ、うちの運転手が、わたしが気がつかないと思って、わたしのこのお忍びの外姿を、あきれたように見ていたようすを。うち明けて申しますと、もっとも高貴な家柄を示す姓が五つか六つありますけれど、わたしの姓は、生れながらにして、その一つな

のですわ。わたしが言葉をおかけしたのも、スタッケンポットさん――」

「――パーケンスタッカーです」と青年は遠慮勝ちに訂正した。

「――パーケンスタッカーさん、せめて一度でも、自然のままの人間と――いやしい富の虚飾や、はかない社会的な優越などに汚されてない人とお話がしたかったからですわ。おお！ わたしが、どんなにうんざりしているか、あなたにはおわかりにならないでしょう――金、金、金！ ほんとにうんざりしますわ。それに、わたしの周囲の人たちにしても、みんな同じ型につくられた、くだらない操り人形が踊っているようなものなのです。娯楽も、宝石も、旅行も、社交も、あらゆる種類の贅沢も、もうほとほといやになりましたわ」

「ぼくは、いつも思っていたんです」と青年は、躊躇しながらも、勇気を出して言った。「お金というものは、さぞかしすばらしいものだろうと」

「過不足のない財産、それが一番のぞましいと思いますわ。何百万とあってごらんない、そうしたら――」彼女は絶望的な身ぶりで結論した。

⑥それこそ単調そのものですわ」そして、彼女はまた言葉をついだ。「つくづくいやになりますわ。ドライブ、正餐会、お芝居、舞踏会、晩餐会、しかもそれが、どれもこれも、あり余るほどのお金で飾りたてであるのですもの。どうかすると、シャンパン・グラスのなかで鳴るあの氷の音を聞いただけで、頭が変になることがありますわ」

女性はこの後、上流階級の華やかな世界の話を続け、ドイツのとある公園の大公とイギリスの侯爵から求婚されていると話す。

「なぜ、こんなことを、あなたにお話しせずにはいられないのか、おわかりになりますか、パッケンスタッカーさん？」

「パーケンスタッカーです」と青年は小さな声で訂正した。「ほんとうに、ぼくがあなたのご信頼を、どんなにありがたく思っているか、あなたにはおわかりにならないでしょう」

女は、いかにも⑦を示すのに適した、落ちついた、非人間的な眼ざしで、さぐるように彼を見た。

「あなたはどんなお仕事をしていますの、パーケンスタッカーさん？」と彼女はきいた。

「たいへん下等な職業です。しかし、ぼくは出世を望んでいます。さつきあなたは、身分の低い男でも愛することができるとおっしゃいましたが、あれは本気なのですか？」

「ええ、本気ですわ。でも、わたしは、『かもしれない』と申したのですわ。

だって、いまは大公のこともあるし侯爵のこともありますもの。でも、どんな職業でも卑しすぎるということはないはずですわ、⑧わたしの理想にかなう人でしたら――」

「ぼくはいまレストランで働いているのです」とパーケンスタッカー君は、はっきりと言った。

女は、ちよつとたじろいだようであった。

「給仕としてではないでしょうか？」と彼女は、やや哀願するように言った。

「労働は神聖ですわ、でも――従僕とか――給仕とか――」

「ぼくは給仕ではありません。出納係をしているんです」――真向いの、公園の反対側に接した大通りに、「レストラン」と綴られた、きらびやかな電飾看板が光っていた。――「あすこに見えるあのレストランの出納係をしているんです」

女は、左の手首の、きれいな飾りのついている腕環にはめこまれた小さな時計をのぞき、あわてて立ちあがった。そして、腰のあたりで手にもっているけけけらしいハンドバッグに例の本を突っこんだ。しかし、そのハンドバッグには、いささか本が大きすぎた。

「なぜ、今日はお勤めをしていらつしやらないのですか？」と彼女はきいた。

「今日は夜勤なのです」と青年は答えた。「勤務時間までに、まだ一時間あります。もう一度お会いできないでしょうか？」

「わかりませんわ。多分お会いできると思いますが――でも、二度とこんな気まぐれを起すことはないかもしれませんわ。とにかく、急いで行かなければなりません。晩餐会がありますし、それからお芝居へ行かなければなりません――ああ、毎日毎日、同じことのくり返しですわ！ きつとあなたは、ここへいらつしやるとき、公園の向うの入口においてある自動車にお気づきになったと思いますけれど――白い車体の自動車ですわ」

「車輪の赤い車ですわ」と青年は考えこむように眉を寄せてききかえした。

「そうですわ。わたしは、いつもあれでまいますの。あそこで運転手のピエールが待っているのです。ピエールは、わたしが広場の向うの百貨店で買物をしていと思うているのですわ。自分の運転手までたまさなければならぬような束縛された生活をご想像くださいな。では、さようなら」

「もうだいたい暗くなりました」とパーケンスタクシー君は言った。「公園には無法者がたくさんいます。⑥よろしかったら、一緒に——」

「わたしの気持ちを、すこしでも尊重してくださいさるおつもりがあったら」と女は、きっぱりした口調で言った。「わたしがいち去ってから十分間だけ、このベンチを離れないでくださいな。あなたをとがめるつもりはございませんけれど、自動車には、たいてい、その持主の名前の組合せ文字がついていますでしょう？　では、もう一度、さようなら」

足早に、⑩ようすで彼女は夕闇の中へ歩き去った。青年がその美しい姿に見とれていると、彼女は公園の外れの舗道まで行き、そこから舗道に沿って自動車置いてある角のほうへ歩いて行った。彼は、彼女との約束を裏切って、躊躇なく、公園の木立や灌木の植込みの中を、彼女が進むのと平行に、その姿を見うしなわぬよう見えがくれにつけはじめた。

彼女は角のところまで行くと、ちらと横を向いて自動車にべつをくると、そのまま自動車のわきをすりぬけて、どんどん通りを横ぎって行った。折よくとまっていた車のかけにかくれて、青年は、じつと彼女の行動を見まもった。公園の向う側の歩道を⑪下手へ歩いて行くと、彼女は、例のきらびやかな電飾看板が

かかっているレストランへはいって行った。そこは、よくそのへんで見られるあのけばけらしいレストランの一つで、店内は、白ペンキを塗りたくり、鏡が飾ってあって、安直に、しかもちよいと豪華な気分である店だった。女はレストランの一番奥の部屋へはいって行ったかと思うと、帽子とヴェールをぬいで、すぐにまた出てきた。

出納係の机は入口のすぐ近くにあって、それまでそこに腰かけていた赤毛の若い女が、腰かけから降りてきたが、降りながら、あてつけがましく掛時計にちらと目をやった。⑬そのあとに腰をおろしたのが灰色のドレスの女であつた。

青年は両の手をポケットに突っこんで、ゆつくりと歩道をひきかえして行った。街角で彼の足は、そこに落ちて、小型の紙表紙の本を蹴飛ばした。本は芝生のところまでとんで行った。表紙の絵で、さつき女が読んでいた本だとわかった。彼は何気なくそれをひろいあげて見た。本の題は「新アラビア夜話」——作者はステイヴンソンという名であつた。彼はそれをもとの草の上に放り投げ、⑭しばらくのあいだ決心がつかねたように、そのへんをぶらぶらしていた。やがて、そこにおいてあった自動車に乗りこみ、クッションによりかかると、運転手に向って、ふたことだけ言った。「アンリ、クラブへ」

\* 欣然：よろこんで物事をするさま

(O・ヘンリ「自動車を待つ間」新潮文庫「O・ヘンリ短編集」(一))

(1) ———— ①「あなた方」とありますが、これはどのような人たちのことですか。具体的に言っている部分を本文中から八字で書きぬきなさい。

(2) ———— ②「なれなれしい態度」とありますが、青年のなれなれしさをよく表した言葉を本文中から一語で書きぬきなさい。

(3) ———— ③「青年は遠慮勝ちに訂正した」とありますが、これは青年のどのような立場を反映したのですか。——— ④から——— ⑤の間の本文中から一語で書きぬきなさい。

(4) ———— ①「それこそ単調そのものですわ」とありますが、彼女が物語る生活ぶりとはどのようなものですか。

ア 満ち足りた生活の中で、何不自由なく生活している。 イ だれもがうらやむ生活の中で、実は貧乏な生活をしている。  
ウ 質素な中であつても、向上心を持って生活している。 エ 周囲をあざむきながらも、自分をつらぬいて生活している。

(5) ———— ⑤に入る言葉を選びなさい。

ア 青年への好意 イ 現実社会の厳しさ ウ 周囲への憧れ エ 二人の身分の相違

(6) ———— ⑥「わたしの理想にかなう人」とありますが、この女性が心から思う理想の人物とはどんな人ですか。

ア 下等な職業の人 イ 高貴な家柄の人 ウ 身分の低い人 エ 出世欲の高い人

(7) ———— ⑦「よろしかったら、一緒に」という青年の提案を女性はこの後断ります。その理由を次の中から選びなさい。

ア 自分のついたこれまでのうそがばれてしまうのをおそれたから。  
イ この青年が好みでなく、これ以上ついてこれられても迷わくだから。  
ウ 自分の出自である高貴な家柄が具体的にわかつては困るから。  
エ これからちがう用事があり、そのため車に乗る必要がないから。

(8) ———— ⑧に入る言葉を選びなさい。

ア あわてた イ おこった ウ 気づった エ うれしそうな

(9) ———— ①「下手」の本文中での読みを答えなさい。

(10) ———— ①「そのあとに腰をおろしたのが灰色のドレスの女であつた」とありますが、この展開が暗示されている最初の一文を本文中から探し出し、はじめの五字を書きぬきなさい。ただし、句読点も一字とします。

(11) ———— ⑫「しばらくのあいだ決心がつかねたように」とありますが、この「決心」とはどのようなものですか。

ア 彼女の不思議な行動をとがめようという決心 イ 彼女の思いに応えてあげようという決心  
ウ 彼女の正体をあばいてやろうという決心 エ 彼女のことをあきらめようという決心

(12) この「自動車を待つ間」という作品の作者であるO・ヘンリは「賢者の贈り物」や「最後の一片」で知られるとおり、作品の結びに思わぬ結末をもたらすことでも有名です。この物語の思わぬ結末とはどのようなものですか。三十五字以上四十字以内で答えなさい。

|     |  |
|-----|--|
| 氏 名 |  |
|-----|--|

|      |  |  |  |  |  |
|------|--|--|--|--|--|
| 受験番号 |  |  |  |  |  |
|------|--|--|--|--|--|

・句読点や「 」も一字とします。  
・記号の付いているものはすべて記号で答えなさい。

|   |       |     |     |         |           |         |
|---|-------|-----|-----|---------|-----------|---------|
| 一 | (1)   | (2) | (3) | (4)     | (5)       | (6)     |
|   | ハ ッ キ | ツ く | ス ジ | ホ ガ ら か | イ サ ギ ヨ い | チ ョ キ ン |

|   |     |     |     |  |  |   |  |     |     |  |  |   |  |  |  |
|---|-----|-----|-----|--|--|---|--|-----|-----|--|--|---|--|--|--|
| 二 | (1) | (2) | (3) |  |  |   |  | (4) | (5) |  |  |   |  |  |  |
|   |     |     |     |  |  | ～ |  |     |     |  |  | ～ |  |  |  |
|   | (6) |     | (7) |  |  |   |  |     |     |  |  |   |  |  |  |
|   |     |     |     |  |  |   |  |     |     |  |  |   |  |  |  |

|   |     |     |     |     |  |  |   |   |  |  |   |  |  |  |
|---|-----|-----|-----|-----|--|--|---|---|--|--|---|--|--|--|
| 三 | (1) | (2) | (3) | (4) |  |  |   |   |  |  |   |  |  |  |
|   |     |     |     | ①   |  |  | ② | ③ |  |  |   |  |  |  |
|   |     |     |     |     |  |  |   |   |  |  | ～ |  |  |  |

|   |     |     |     |     |     |     |  |  |  |  |     |     |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--|--|--|--|-----|-----|
| 四 | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) |  |  |  |  | (7) | (8) |
|   |     |     |     |     |     |     |  |  |  |  |     |     |

|   |      |     |     |     |     |     |  |     |      |  |  |     |      |  |  |
|---|------|-----|-----|-----|-----|-----|--|-----|------|--|--|-----|------|--|--|
| 五 | (1)  |     |     |     |     |     |  | (2) |      |  |  | (3) |      |  |  |
|   |      |     |     |     |     |     |  |     |      |  |  |     |      |  |  |
|   | (4)  | (5) | (6) | (7) | (8) | (9) |  |     | (10) |  |  |     | (11) |  |  |
|   |      |     |     |     |     |     |  |     |      |  |  |     |      |  |  |
|   | (12) |     |     |     |     |     |  |     |      |  |  |     |      |  |  |
|   |      |     |     |     |     |     |  |     |      |  |  |     |      |  |  |
|   |      |     |     |     |     |     |  |     |      |  |  |     |      |  |  |
|   |      |     |     |     | 35  |     |  |     |      |  |  |     | 40   |  |  |

|    |  |
|----|--|
| 合計 |  |
|----|--|